

2013 年度 第 29 回

在日アジア人留学生への研究補助

受給生紹介



東京・三田の慶應義塾大学にて

RASAーアジアの農村と連帯する会
Rural Asia Solidarity Association

氏名 Xatgul Mirxat (しゃちくり めるしゃと)
出身 中国・新疆ウイグル
大学 お茶の水女子大学大学院
ジェンダー社会科学専攻 研究生



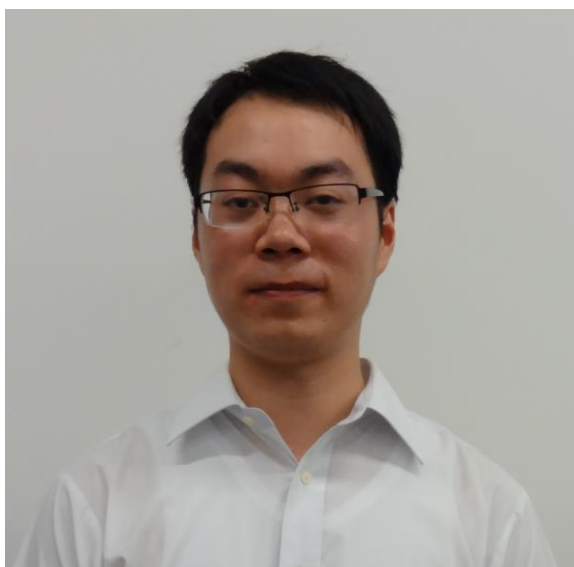
(留学目的)

日本は高度な科学技術を持ち、世界の先進国として、大学院・研究所では毎日先進的な研究が行われ、次々に新しい技術や理論が生み出されています。同時に、日本は、自分の特別な「個性」と国際的な「個性」が一緒に行き延ばし、新しい「個性」がある地域と言えると思います。私の出身地新疆ウイグル自治区は、開発が急速に進む地域である一方、生態環境の破壊、インフラ建設の遅れなど、取り残された貧困地でもあります。私は、新たに開発に組み込まれた地域に、いかに貧困を発見するかと考えたのです。伝統的な生活と貧困の区別はどこにあるのかについて考えたいと思います。それから、日本の「個性」から深く理解しながら、自分の興味があり農村地域開発を研究し、その研究成果を新疆ウイグル自治区にて応用していきたいと考えました。

(研究課題)

中国の経済開発は東部の沿海地域に集中し、西部の開発は大きく遅れています。このため、中国国内で東部と西部の貧富の差が発生し、大きな課題となっています。現在のグローバル世界で、開発をさせている地域がたくさんありますが、忘れられている貧困地もあると言えます。私は新疆ウイグル自治区の農村の中で、アクス地域にある貧困地とされているカルピン県を対象とし、実現的な存在して「見える貧困」と「見えない貧困」から、「貧困」の意味について研究するとともに、その自然環境と結びついた生活状況を分析し、地域開発にとってどのような条件が必要なのか考えてみたいと思います。

氏名 顧 俊峰 (こ しゅんほう)
出身 中国
大学 神戸大学
国際協力研究科
研究生



(留学目的)

急速的な都市の発展につれて、中国には毎年の災害により、様々な都市問題が著しく現れている。他方、高成長に伴い、都市化が速過ぎ、都市人口が急激に増加し、都市リスクが増え、人的災害確率が高まりつつある。従って、日本都市防災計画などに関する研究を通じ、中国の諸都市に最適な防災都市計画の体系、方法、技術を模索する必要があると思っている。これに対して、私は日本へ留学し、先進の日本防災計画理論及び技術に関する研究をしたい。

(研究課題)

私は日本都市の成長期における防災の考え方及び反省点を学びたいし、阪神・淡路大震災から神戸市の復興への取り組み、経験と教訓を学びたいし、東日本大震災の経験と教訓を学びたい。その上に、中国におけるリスク・災害に強い都市づくりのための都市計画上の対応策を研究したい。

現在、私は研究生として神戸大学に在籍している。日本語を勉強しながら、専門知識を学び、大学院の入学試験の準備をしている。

氏名 木其尔（むちる）
出身 中国・内モンゴル
大学 滋賀大学
経済学研究科
博士2年



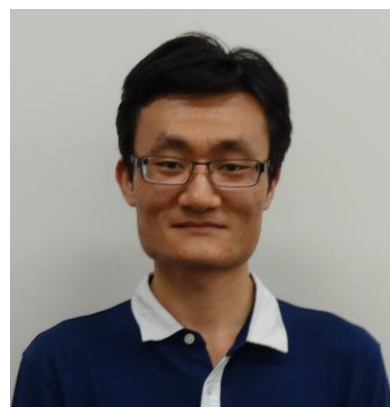
（留学目的）

私は中国の最貧地域の一つである内モンゴル地域で生まれ育ちました。大学入学時から、当地域の経済と環境の両立を図りつつ、貧困からの脱出を行うことに関心を持ち始めました。そこで、工場からの排水や煤煙等公害問題を克服し、先進工業国でありながらも、先進国で最も緑の豊かな国として、経済と環境の両立に成功している日本に興味を持ち、日本への留学を決心しました。

（研究課題）

私の研究テーマは「生態移民政策下における牧畜経営の行動解明」です。本研究では、中国政府による「退耕還林」・「退牧還草」プログラムの一環として開始された、生態移民政策が牧畜経営に及ぼす影響を解明することを通じて、移住民である牧畜農家をいち早く貧困から脱出させる政策としての生態移民政策の妥当性を明らかにすることを目的としています。また、移住を主な手段とする貧困緩和政策における社会的ネットワークの構築に関する今後のあり方や、資源回復を目的とする環境政策の実施に向けた政策的含意も検討しています。

氏名 張 人大 (ちょう じんだい)
出身 中国
大学 東京大学
総合文化研究科
研究生



(留学目的)

私は、中国雲南省大理ペー族自治州に生まれ育ったペー族です。中国の大学で文化人類学を専攻しましたが、日本と比べて、中国の文化人類学の教育システムは不十分であることを知りました。日本は、高度な教育を受けられるだけでなく、研究に取り組むためのすばらしい環境が整っています。私は、より高度な専門性を備えた大学院に進学したいと考え、日本に留学しました。将来は、大学の研究者として研究を続け、両国の文化人類学の交流に貢献することを目標としています。現在は、研究生として東京大学に在籍しています。

(研究課題)

研究タイトル：生態環境と地域住民—環境に関する知識の文化人類学的研究

異常気候、大気汚染、森林破壊とそれに伴う生物の絶滅などの環境問題に関する記事は、ほぼ毎日、新聞に掲載されると言える。環境問題が人間の生存を脅かし、この問題はすでに今の世界が直面する重大な課題の一つとなっている。現在、中国における環境に関する問題において、人類学者の声があまり多く聞かれないことは非常に残念なことである。特に人々がどのように環境を理解しているか、また人々と環境との相互作用はどのように展開しているかについて人類学的研究を推進し、その知見を環境問題解決のために応用していくことは、我々が現在、直面する環境問題に対して重要な意味があると思う。

それぞれの社会において、文化と環境の関係について考察するためには、人々がどのように環境と関わっているかだけでなく、経済構造や政治体系、生業形態、親族構造、宗教信仰などの様々な側面から、地域住民の生態学的価値観と環境知識について分析する必要がある。本研究は、文化と環境に関する文化人類学的な理論を、より幅広い現代的な状況に位置づけて発展させることを目的としている。そのことによって、理論を実際の環境問題解決に応用できると同時に、一般の人々にも持続可能なライフスタイルを提案することができると考える。人類学においては古典的なテーマですが、世界的に環境意識が高まっている今日においてこそ、一層の批判的な再検討を要する極めて重要な課題であると思う。

氏名 韓 希姫 (はん ひ じょん)
出身 韓国
大学 京都市立芸術大学
美術研究科
博士3年



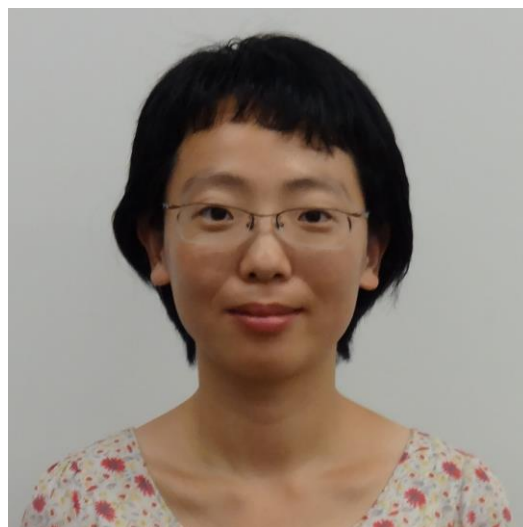
(留学目的)

先祖から受け継いだ伝統文化を保存・継承・発展させることは現時代を生きる我々の重大な課題であると考えられます。韓国で博物館の学芸研究員に携わっていた際、世界に散在する文化財保存修復研究と人材育成のために国境を越え支援を惜しまず励む日本の文化財研究機関に感心したことが留学のきっかけとなりました。そして韓国の絵画文化財の保存修復における劣悪な環境を改善して行くため、日本での留学に挑みました。日本での研究成果が個人の実績に止まらず、日本・韓国の研究交流を通じた絵画文化財の保存修復及び伝承発展の礎になることを念願しながら研究に取り組んでいます。

(研究課題)

韓国の国宝第 297 号 1652 年信謙作清原『安心寺靈山会掛仏幀』における研究調査を基にした原寸大古色復元模写を通して 17 世紀朝鮮時代に野外で行われた仏教儀式行事用として制作された大型仏画‘掛仏幀’の材料と制作技法に関する本質的研究を試みる。

氏名 石 岩 (せき がん)
出身 中国
大学 首都大学東京
人間健康科学研究科
博士 3 年



(留学目的)

私は日本の作業療法を勉強するため、来日しました。大学時代、リハビリ科で臨床研修の時、脳卒中のため右利き手が不随だったおばあちゃんが作業療法を通して、再びお箸を持てるようになったことを見て、感動しました。薬は万能ではないことに気付かして、もっと知識を追求したいとおもいました。しかし、中国の作業療法の歴史が浅くて、特に老年期作業療法の領域はまだ空白地帯であることがわかりました。その時、指導先生が日本の作業療法を紹介してくれました。人間を中心として先端な技術でクライアントの生活の質を改善するところに魅力があると思いました。そこで、日本に行って、本格的な作業療法を勉強し、博士号を取ろうと決意しました。将来、留学の経験を生かし、独自のプログラムを作り、中国高齢者リハビリ事業に貢献したいと思います。

(研究課題)

研究テーマは、中国語版在宅高齢者の包括的環境要因評価法の開発および応用です。中国では、高齢化とともに、高齢者の生活の質いわゆる QOL を向上させるのが重要な課題となっています。人間作業モデルにより、環境は高齢者の QOL に大きく影響する要因であることが明らかにされています。高齢者に環境面への支援を提供することは QOL の向上に欠かせないと考えております。そこで、本研究では在宅高齢者の環境ニーズ評価法を開発し、ニーズを把握した上で支援法も検討することを目的とします。

氏名 李 在鎬 (い じえほ)
出身 韓国
大学 東京大学
総合文化研究科
博士1年



(留学目的)

私自身にとって日本留学は当たり前のことである。それは私が大学の時、日本語日本文学を専門としたことから始まったと言える。大学の時2年ほど(2-3年生)専門として勉強しながら物足りなさを感じ、交換留学で日本にやってきた際に日本での研究の必要性を更に強く感じた為である。それは母国の大学より、自分が経験した日本の大学の勉強・研究に対する素晴らしい姿勢の他、日本語と関連する研究をするからには日本に留学するしかないと考えたためである。

そして東京大学に入学した理由は現在の指導教員の先生がこちらにいらっしゃる為である。研究テーマとして考えていた、在日コリアンの言語に関する研究をなさっている方は他にいらっしゃらない為である。

(研究課題)

現在考えている研究課題は、まず博士論文と関連するものとして修士論文で書いた内容(朝鮮学校の学生たちが使う朝鮮語の文法的特徴とドメインによる言語使用を中心にかいたもの)の発展した形で、学生たちが影響を受け得る学校の教員と周辺コミュニティでの言語使用を調べることを目的としている。現在はそれを目指して調査計画を立てている段階である。

その他に大学院の入試の為に書いた論文(韓国語を母語とする人たちの中でも日本語アクセントのような高低アクセントがある韓国語の方言を話す人たちとそうでない人たちの間に日本語アクセント習得の度合いがどうなのかを調査・分析したもの。)をより発展した形にすることを目指している。

氏名 林 志妍 (いむ じよん)
出身 韓国
大学 お茶の水女子大学
人間発達科学研究科
博士4年



(留学目的)

私は、大学で保育を学び、常に韓国の保育現場における知的・早期教育的傾向に問題意識を持っていました。さらに、3年間の幼稚園教諭の経験は、私の学んだ保育理論や方法が子どもの自然な成長をかえって妨げるのではないかと疑問を持たせました。そこで数年前、交換学生の頃見た日本の幼稚園の実践、つまり、子どもが戸外で土や水など自然に触れて遊べる保育こそが、子どもにふさわしいと自覚しました。韓国での修士課程では、日本の「自由保育カリキュラムの理論と実践」をテーマとし、日本の幼稚園を一ヶ月観察し、論文を書きました。日本の幼稚園での一ヶ月の経験は、韓国人の私のもつ保育に対する観念を底からひっくり返し、新たな保育のヴィジョンを与えました。私の日本留学は、自然と子どもの遊びを重視する日本の保育思想と実践を深く学ぶためであり、そのため、日本初の幼稚園の生まれたお茶の水女子大学に進学しました。卒業後には、自然と遊びを重視する保育を韓国に広げるのに貢献したいと思います。

(研究課題)

私の研究のテーマは「日本と韓国の保育カリキュラムにおける『環境』捉え方の比較」です。「環境」の重要性は、現代社会の子どもの成長において、最も強調されてきました。日本でも急速な産業化の進んだ平成元年、保育における環境の捉え方が変わり、「環境を通した保育」が宣言され、子どもの生活と遊びを中心とする保育カリキュラム論が強調されるようになりました。一方、同じ産業国の韓国の保育では、「環境」への捉え方が日本と異なります。そこで、日韓の保育カリキュラムにおける「環境」の捉え方の共通点と差異を解明し、現代産業国において重視すべき保育環境の捉え方を見出すことは重要です。さらに、日本の保育「環境」論をアメリカの影響を強く受けた韓国の保育「環境」論と比較することで、東アジア的保育の特徴を模索することにも繋がると思います。比較における具体的な着目点は、両国のナショナル・カリキュラムの変遷、指導計画の作成、そして、自然環境の取り組みとなります。